

3 まちづくりビジョン

(1) 桜町・花畑周辺地区の課題と展望

① 中心市街地活性化基本計画による位置づけ

4つの地区で構成される熊本の中心市街地

熊本市の中心市街地は、北は熊本城周辺から南はJR熊本駅周辺までの白川右岸のエリアに広がっており、次の4地区で構成されています。桜町・花畑周辺地区は、主として商業、業務等の都市機能を集積させる通町・桜町周辺地区の中に位置します。

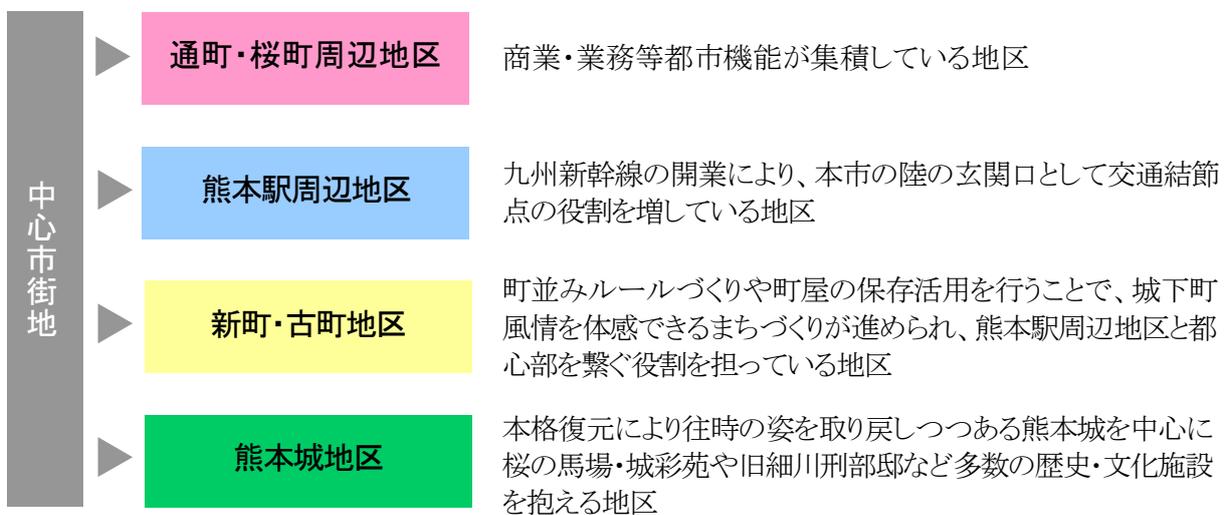


図 3-1.熊本市の中心市街地を構成する4地区

「熊本市中心市街地活性化基本計画(熊本地区)」より

②都市機能の現状

2核3モール中の一核を成し、MICE^{※1}施設の整備が予定される桜町・花畑周辺地区

桜町・花畑周辺地区は、通町地区の鶴屋百貨店周辺とともに本市の2つの大きな商業核の1つとして中心市街地の賑わいを創出する場所として発展してきました。

シンボルプロムナード周辺には、熊本市国際交流会館や崇城大学市民ホール(市民会館)などの文化施設、NTT 西日本、朝日新聞社など情報・メディア企業、熊本城や桜の馬場・城彩苑を中心とした観光交流施設が立地しており、上通、下通、新市街と続くアーケードにも気軽に歩いて行ける距離にあります。

さらに、シンボルプロムナードに面する二つの再開発地区では、桜町地区において、3,000人収容可能なMICE施設、観光やビジネスで地区を訪れる来街者のための宿泊施設、地区の商業と連携し集客力を向上させる核となる商業施設などの機能の導入が検討されており、花畑地区では文化ホールの設置などが検討されています

熊本最大の「駅」:交通センター

この地区には、バス交通の拠点である交通センターが立地しています。同センターでは、熊本県全域、京都・大阪・神戸等の関西方面や福岡・長崎・鹿児島・宮崎・大分等の九州各地へ行き来するバスが1日平均約5,700回発着^{※2}し、1日約40,000人が利用^{※2}しています。JR熊本駅の1日平均乗降客数が約20,000人であることから、交通センターは言うなれば県下最大の「駅」といえます。

この交通センターは施設の老朽化やバスルートの統合に伴う再整備、構内の歩行者動線に段差が多いなどの課題を抱えており、今後桜町地区再開発事業でリニューアルが予定されています。

※1MICEとは、企業等の会議(Meeting)、企業等の行う報奨・研修旅行(Incentive Travel)、国際会議や全国規模の大会、学会(Convention)、展示会・見本市、様々なイベント(Event/Exhibition)などを包括した新しい集客施策の枠組み。

※2 出典:熊本交通センターHPより。

URL http://www.kyusanko.co.jp/terminal/pages_green_gaiyou.htm

③ 中心市街地の4地区をつなぐ“かすがい”

中心市街地の再デザインに取り組む中で、桜町・花畑周辺地区においては、九州中央の交流拠点都市にふさわしい魅力ある都市の顔とするため、熊本城地区、通町・桜町地区、新町・古町地区、熊本駅周辺地区のそれぞれの個性を磨き、相互の連携を高めていく必要があります。そのため、熊本城から白川へ至るシンボルプロムナードを含む南北の軸を4つの地区を繋ぐ”かすがい”として整備し、連携の向上を図ります。



図 3-2. 桜町・花畑周辺地区の位置づけと地区をつなぐ“かすがい”のイメージ

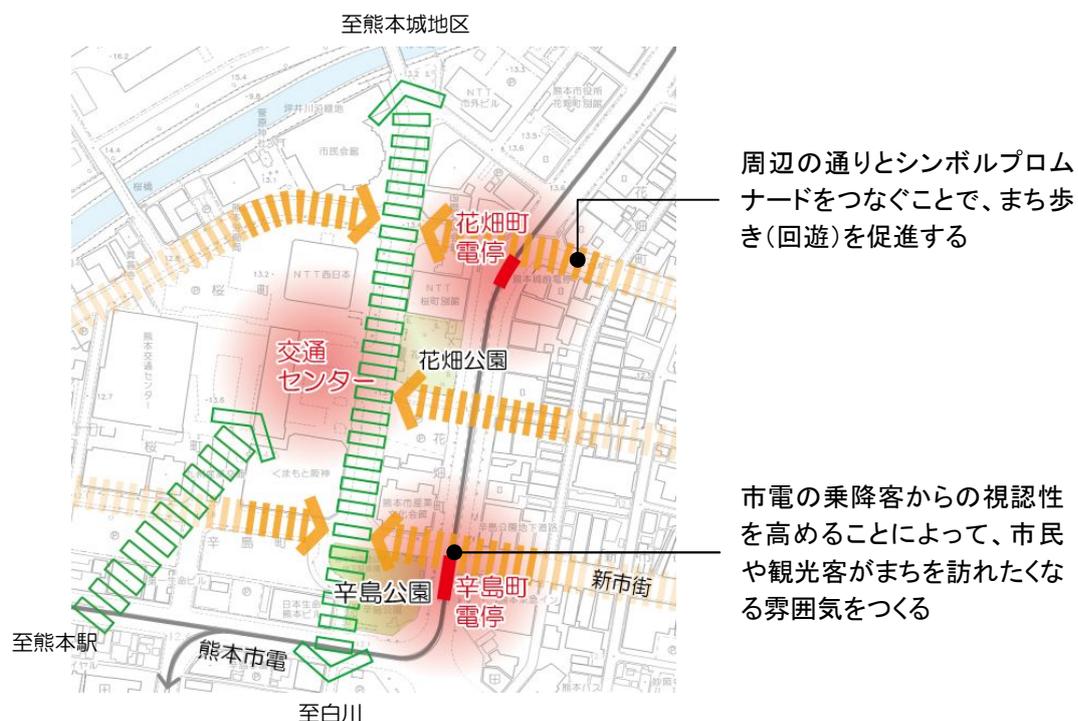


図 3-3. “かすがい”として果たす役割のイメージ

④シンボルプロムナード化による通町・桜町地区の回遊性の向上

通町・桜町周辺地区は中心市街地の中でも「2核3モール」を中心に集客力が特に高く、同地区の集客が中心市街地全体への集客に繋がることから、拠点性をさらに高め、また新たな魅力創出や安全安心で快適な歩行空間等を確保し、活力と賑わいに満ちた空間形成が求められています。

一方、近年 2 核の一方である桜町周辺地区における通行量は減少傾向^{※1} にあり、中心商店街をはじめとした熊本城周辺の回遊性の向上が重要な課題となっています。

今後は、シンボルプロムナードとその周辺の諸機能の連携などにより回遊性の向上に努め、中心市街地の活性化を図ります。

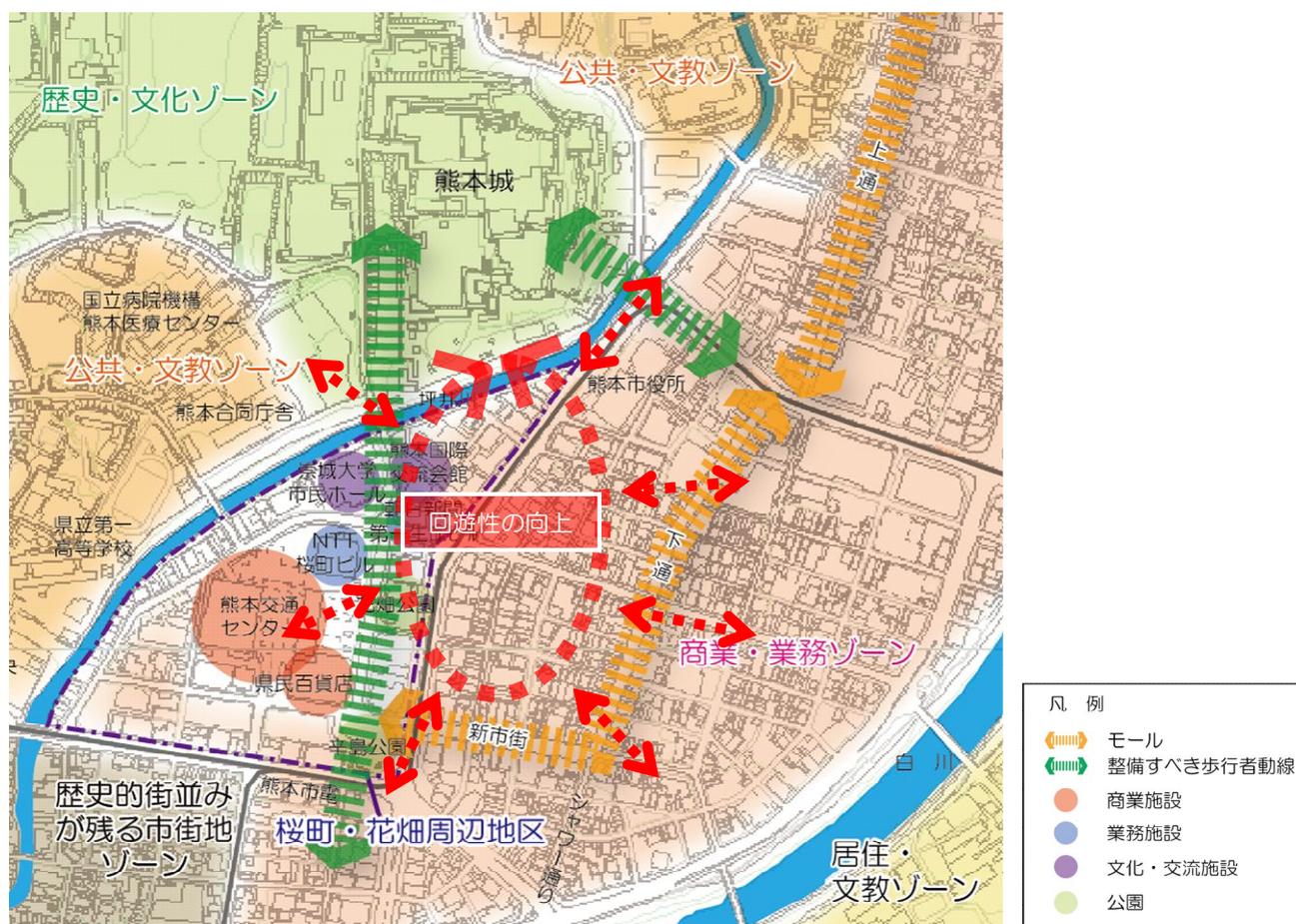


図 3-4. シンボルプロムナード整備による通町・桜町地区の回遊性の向上

※1 平成 22 年度商店街通行量調査結果より。

通町・花畑周辺地区を含む「中心商店街」全体における通行量は前年度比で平日 1.9%減、休日 8.5%減、合計では 5.2%減と特に休日の減少が顕著であったが、パルコ南側の地点では平日休日計 5.8%増、鶴屋西側の地点では計 1.2%増、上通と直交する裏通りへと抜ける坂梨カメラ前で計 5.9%増と一部では増加も見られ、人の流れが変化していることがうかがえる。

(2)桜町・花畑周辺地区の特性から見た担うべき役割

桜町・花畑周辺地区は、地区の持つ特徴的な歴史性や立地特性を踏まえたまちづくりを推進する役割を担うと考えます。

当地区は江戸期に国許屋敷に定められ政務の中心であった花畑屋敷があり、かつては日常的に藩主とその家臣達が熊本城との間を行き来するお城と庭続きのような関係にありました。加えて、熊本城のすぐそばからお城を望むことができる立地にあり、こうした歴史性や景観特性に配慮し土地の記憶を継承するまちづくりが求められます。

また、明治期以降の近代には、大正の三大事業による近代都市化、百貨店の新設や市電の拡張整備等により、熊本市の商業・業務中心地として発展し、東京五輪聖火イベントや展示会場など市民にとってのハレの場として利用されてきた経緯があり、こうした地区特性を活かしたまちづくりが求められます。

さらに、現在当地区に立地する交通センターは熊本県全域、関西方面や九州各地から1日に40,000人以上の市民や観光客が訪れる県下最大の「駅」であり、地区周辺は「駅前」にふさわしく人々が集い寛げる魅力的な顔づくりが求められます。

(3)目指すべき姿

当地区の担うべき役割を踏まえ、以下の観点から目指すべき姿を整理しました。

これは、中心市街地の再デザインや熊本城の眺望を大切にする景観づくりを牽引していく当地区のまちづくりのビジョンとなるものです。

目指すべき姿

① 花畑屋敷など歴史・土地の記憶を継承する空間

熊本城と一体の庭つづきのような花畑屋敷がかつて存在した歴史を継承した空間であり、和の精神に基づく洗練された柔軟性を有する空間

② お城への眺望を活かしたハレの場・おもてなしの空間

熊本城への景観のための「秩序」と活力を生み出す「多様性」が調和する空間であり、ハレの場、おもてなしの場として自由な使い方ができる変幻自在の空間

③ 日常的に集える水や緑豊かな空間

お城と庭つづきの緑とかつて花畑屋敷にもあった泉水に包まれた、集い、くつろぐ空間であり、周辺の建物がそれを演出する空間

④ 交通センターという熊本最大の「駅前」という特性を活かした空間

県下最大の「駅」に面する熊本の顔として、熊本といえばここといえるような象徴的な空間